ない図であった。Sandstede によると標本は Scriba 腊葉庫に附属したものであり，又 Vainio は標本に名前をつけたのみで正当の発表はしていないのである。所で Scriba の腊葉は Sandstede の腊葉と一所に Berlin-Dahlem の博物館で戦火の犠牲となったと考えられるので原品を見ることは不可能であるが，或はフィンランドにある Vainio の腊葉庫にはその控え標本があるかも知れないと考え，Turku 市の Dr. Alava 君に照会したところ早速3個の標本を貸し出してくれた。但しこの包紙には *Cladonia delicatula* Vain. としてあるがこれは Vainio 腊葉庫管理者の側の何かの誤りと思う。それは Vainio が *Cl. delicata* の異名として挙げた 24 個の異名の内の一つ *Cl. carneobadia* v. *delicatula* Hampe というのがあり，この先行名の存在を Vainio は意識して *subdelicatula* とやったことは殆んど疑いない。さてこの Vainio 標本は一見して伊延君の採集品によく似かよう点が多く一応その変種とするのが妥当と考えられたが，Vainio の命名は正規の発表がしてないので借用した3箇の標本の内の一つ Brasilia, Rio Grande do Sul. Carlos Jürgens, 135. 1909. というラベルを持つ方を lectotype とし§187 にあるようにその学名を合法化し，これの変種として伊延氏採集品を *Cl. subdelicatula* Vain. v. *Inobeana* Asahina (和名イノベハナゴケ) と呼んでいたが，その後更に観察を続行し以下に述べるような異同があることを知った。即ち鱗葉は両者殆んど同一で細裂しその縁は欠刻がある。然るに子柄の方は何れも皮層は殆んど発達しないで軟骨状の内髄が露出しているが，ブラジル産の方はこれに鱗葉又は鱗屑を散生しているに反し，四国産の方は子柄が殆ど裸出し白色の軟骨状で表面わずかに鱗屑を疎生し殊に横断面で四国産の方は殆んど円形の輪廓であるにブラジル産の方は所々凹入して不整の輪廓を現わし子柄の表面に所々縦溝があるようである。これ等を考慮すると四国産のものを独立種としても差支えない気がしたので今後は *Cl. Inobeana* と呼ぶことにする。

但しこの新種にやや似たものがあるので注意したい。それは筆者の腊葉庫に no. 50516 *Cladonia polydactyla* Flk. f. *luxurians* Harm. という名で入れてある。この名称は確定的のものではないが今は整理上この名がつけてある。これは元来赤実節のものであるから有子器のときはすぐ区別されるが子器は極めて稀である。鱗葉がイノベハナゴケより粗大でよく繁茂し，また子柄は多くは単一鋭頭で下半に皮層を被り，上半は粉芽をつけるか又は内髄が裸出している。タムノール酸を含むから反応は同一である。

第 36, 37 巻正誤 (Errata for Vol. 36 & 37)

巻 (Vol.)	頁 (Page)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
36	50	1	*pseudoragiformis*	*pseudorangiformis*
〃	228	10	174	177
37	3655	30～31	対すを	対する
〃	著者名索引 (Author Index)			
	2	10	Kiyotake	Kiyotaka
	3	17	*allmorphus*	*allomorphus*